

THE DAILY JESUS NEWS

An ATJ Ministries Publication by John Wright

デイリー・ジーザス・ニュース #324

金曜日…苦悩と贖罪の日

十字架上のイエスの贖いの犠牲

十字架上のイエスの4番目の言葉：「わが神、わが神！なぜ私を見捨てたのですか？」

マルコ15章33-36節（並行聖書：マタイ27章45-49節、ルカ23章44-45節）

=====

33午後三時ごろ、全地は暗くなり、午後九時ごろまで続いた。太陽が消えたからである。（34）午後三時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。

「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ？」これは「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになつたのですか？」という意味です（詩篇22章1節）。

35 近くに立っていた人々の中にこれを聞いて、「見よ、エリヤを呼んでいる」と言う者がいた。

36するとすぐに、彼らのうちの一人が走り寄って海綿を取り、それにぶどう酒を含ませ、杖の先に付けてイエスに差し出した。残りの者たちは言った。「もう、彼を放っておいてくれ。エリヤが来て彼を救い、降ろしてくれるかどうか、見てみよう。」

=====

注：私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します：マタイ =^{MT}、マーク =^M、ルカ =^L、ヨハネ =^J、使徒行伝 =^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**赤いイタリック体**はイエスの言葉を示します。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト

位置	エルサレムの西の城門の外にあるゴルゴタ
----	---------------------

タイムライン	4月上旬（39ヶ月目）
イエスの生涯の文脈	第8段階：受難週
	E. 金曜日：苦悩と贖罪の日
タイトル：	十字架上のイエスの贖いの犠牲 十字架上でのイエスの4番目の言葉：「わが神よ、なぜ私を見捨てたのですか？」

イエスは午前9時から午後3時まで、十字架上で6時間も苦しみを受けました。これは、十字架刑で死ぬには短い時間でした。ほとんどの人は少なくとも24時間、中には72時間も耐えた人もいました。

十字架刑は、非常にゆっくりと、しかし激しい拷問による死でした。最終的には窒息死、つまり呼吸する空気の不足によるものでした。ゆっくりと脱水症状が進行し、呼吸に必要な臓器が腫れ上がり、肺への気道が閉塞しました。これは、体の内部によって引き起こされる、考えられる最もゆっくりとした絞殺方法でした。十字架によつてもたらされる肉体的、精神的な苦痛は、計り知れません。

イエスがわずか6時間で亡くなったことは、鞭打ちと三度の激しい殴打による損傷の大きさと一致する。イエスは既に鞭打ちで大量の血と皮膚を失っており、ショック状態に陥っていた。頭部への度重なる打撃によって脳が腫れ上がり、激しい頭痛を感じていたことは間違いない。6時間に及ぶ肉体的、精神的拷問は、十字架刑で亡くなったどの人物よりも強烈なものだった。

正午、約3時間にわたる月食が起こりました。イエスの死まで続きました。イエスの生と死の完璧なタイミングで、星と惑星の運行は、創造の瞬間に動き始めた永遠の計画に正確に従つて収束しました。

天空は、イエスの降臨の真実を告げ知らせました。誕生を告げる星から、地上の罪深い人々が創造主に悪行を働かせていることを恥じて顔を隠した太陽まで。暗闇は、まさにこの出来事にふさわしいものでした。イエスが真夜中の闇の中で逮捕されたとき、「今はあなたの時、闇が支配する時である」と言われた通りでした。ルカ22章53節B

十字架上のイエスの最初の三つの言葉は、苦しみの最初の三時間に語られました。そして、正午に闇が地を覆った時から、午後三時に死を迎える最後の数分まで、イエスは沈黙のうちに私たち

の罪を負われました。そして最後に、四つの言葉が爆発的に響き渡り、イエスの生涯は幕を閉じました。今日の朗読では、十字架上のイエスの四番目の言葉を考察します。

「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになつたのですか？」

これはイエスの言葉の中でも最も理解されにくい言葉の一つです。この朗読を通して、この貴重な言葉の意味を分かりやすく理解できるよう努めたいと思います。

これらの言葉を文字通りに解釈すると、誤解が生じます。まるでイエスが父なる神から完全に切り離された理由を真に問うているかのように解釈されるのです。イエスが十字架上で父なる神から完全に切り離されたという見解には、二つの問題点があります。私たち罪人のように、父なる神から生まれながらに切り離されているのです。

まず、三位一体とは一つの神性、すなわち三つの位格が完全な一体性において共存することを意味します。もしイエスが文字通り、絶対的な意味で父から分離されていたなら、神の存在そのものが引き裂かれ、神はもはや三位一体の神ではなくなったでしょう。もしそうなっていたら、宇宙そのものが自壊していたでしょう。十字架上で何が起ころうとも、三位一体の神の存在は変わらなかつたのです。「見捨てられた」としても、神の性質、そして父、子、聖霊の永遠の一体性は変わりませんでした。

第二に、イエスは眞の疑問を抱くのではなく、十字架上で自分に何が起こっているのかをもはや理解していないかのようでした。イエスは自分に何が起こっているのか、そしてなぜ起こっているのかを正確に知っていました。自分を十字架に釘付けにした計画にも、苦しみの中で私たちの身代わりとなつて払つた代償にも疑問を抱いていませんでした。数分後に発せられた最後の言葉からも明らかのように、イエスは父なる神を完全に信頼していました。この言葉を発した時、イエスは何も疑問を抱いていませんでした。では、一体何を意味していたのでしょうか。

詩篇22章の二つの節、22章8節と22章18節が、イエスの死の物語の中で既に引用されていることを私たちは見てきました。イエスの4番目の言葉は詩篇22章1節からの引用です。これがこれらの言葉を解釈する鍵となります。

イエスの時代の聖書は章や節に分かれていませんでした。それぞれの書は最初から最後まで途切れることなく文章が続いていました。あなたも私も、このような書を読んだことはありません。

特に詩篇について考えてみると、それは実際には5つの巻物に分かれています。それぞれの詩篇は、番号ではなく最初の行で識別されていました。イエスがこの言葉を叫んだとき、彼は実際に「詩篇22篇！」と言っていたのです。

この詩篇はすでに2回引用されていますが、これは、聖書全体の中で十字架上の救世主の苦しみに関する最も詳細な預言であるこの詩篇への3回目かつ最も重要な言及です。

この詩篇は4つの主要なセクションに分かれており、恐ろしい苦しみにもかかわらず神への信頼（22:1-5）、十字架上で嘲笑されたことによる精神的・心理的苦痛（22:6-8）、十字架上の肉体的な苦しみ（22:11-18）、そして復活後にこれらの苦しみを通してたらされる勝利がすべての国々に及ぶこと（22:22-31）を描いています。父への信頼を表すセクションが3つあり、それぞれが苦しみを描写するセクションに続いています。

イエスがこの詩篇を通してご自身の死を解釈していたという事実は、十字架上でイエスを嘲笑するために使われた言葉が、実は22章8節から直接引用されていたことに気づくと、さらに明らかになります。さらに、イエスの肉体的な苦しみに関する箇所では、脱水症状の影響、手足に釘が刺されたこと、裸にされたこと、そして上着をくじで引かれたことが、見事に描写されています。

イエスはこの詩篇でご自身の死を解釈することにより、最終章（22:22-31）の勝利を前もって宣言しておられました。この部分は新約聖書のヘブル人への手紙の中で2回引用されています（ヘブル人への手紙 2:12、5:7）。イエスは、父なる神に疑問を抱くような暗い思いや揺らぐ信仰を表現するのではなく、詩篇22篇を、ご自身の死が地上のあらゆる部族、言葉、国民にまで及ぶ救いをもたらすという聖書からの確証として用いられたのです（詩篇22:27-31）。

「すべての人を御自分に引き寄せている」（ヨハネ12:22）と固く信じておられました。これが「詩篇22篇！」という言葉の意味です。それは、イエスが詩篇を成就されたという、最後の勝利の叫びでした。

では、詩篇22章1節の「見捨てられる」とはどういうことでしょうか？ここには重要な点があります。イエスは父なる神の存在を常に意識しながら永遠に生きていました。「わたしを遣わした方はわたしと共におられます。わたしを独りにされたことはありません。わたしは常に、御心にかなうことを行なっているからです。」（ヨハネ8章29節）

イエスは私たちの罪に対する裁き、つまり私たちの身代わりの死刑を受け入れてくださったため、永遠の命において初めて、神との意識的な交わりを失っていることを味わわれたのです。神の存在を深く意識し、神との親密な交わりと交わりを持つことは、罪人である私たちにとっては当たり前の経験ではなく、むしろ例外的なことです。罪は、神を体験する私たちの能力を著しく鈍らせてきました。しかし、イエスはそうではありません。

十字架上で、イエスは父の存在という意識を失いました。父の存在は、イエスに自身のアイデンティティの最も基本的な感覚を与えてくれました。しかし、イエスは父の愛と存在を疑うことは

ありません。それは、私たちと同じように、イエスがそれを感じたかどうかに関わらず、それが真実であるという信仰に頼らざるを得なかつたことを意味します。

イエスは十字架上で、肉体的、感情的、靈的、心理的、そして人間関係のあらゆる面で、完全な苦痛を感じられました。父なる神との意識的な交わりを失ったことは、私たちが神の愛から決して引き離されないことを保証する一因でした。それはイエスが私たちの罪を償うために払われた代価の一部でした。しかし、それは父なる神と聖霊から実際に引き離されたことを意味するものではありませんでした。

応用：

イエスは私たちの代わりに亡くなる際、父なる神の臨在を意識できなくなつても耐え忍ばれたため、私たちは神が決して私たちを離れず、見捨てないという確固たる約束をいただいています。ヨセフに受胎と誕生を告げられた際、イエスに与えられた名前の一つは「インマヌエル」、つまり「神は私たちと共におられる」という意味でした。マタイによる福音書の中で、イエスが私たちに残した最後の言葉は、「わたしは世の終わりまで、あなた方と共にいる」でした。

イエスが父と聖霊との意識的な交わりを大切にし、育んだように、私たちもイエスの存在を意識して生きることを学ばなければなりません。

これは、私たちのために十字架上でご自身が苦しめたことによって保証された、主の臨在の約束を信じることから始まるのです。イエスは詩篇22章を私たちのために経験されました。それは、私たちが永遠に主の愛の臨在の栄光と無限の豊かさを喜ぶことができるようになります。イエスの4番目の言葉は、主が永遠に私たちと共にいることを保証しています。

今日は、神があなたと共にいるという意識をどのように育てていきますか？